高精度流体解析のためのHermite型要素を用いた特性有限要素法の開発

1. はじめに

筆者らは,有限要素法による高精度流体解析のために,移 流拡散問題によって,Hermite型要素を用いた特性有限要素 法として,SLG(semi-Lagrange Galerkin)法¹⁾と,HCG (Hermitian characteristic Galerkin)法²⁾を提案してきた. さらに,HCG 法の時間離散に動的構造解析でよく用いられ る線形加速度法を用いた新たな時間2次精度の手法³⁾(以 下,HCG-LA法と略す)を提案した.本研究では,HCG-LA法を2次元非圧縮性Navier-Stokes方程式に適用し,数 値実験によって精度検証したものを報告する.

2. 非圧縮性 Navier-Stokes 方程式

境界 $\Gamma (\equiv \partial \Omega)$ を有する領域 $\Omega \subset \mathbb{R}^2$ において,非圧縮 性 Navier–Stokes 方程式を考える.

$$\begin{cases} \rho \left(\frac{\partial \boldsymbol{u}}{\partial t} + \boldsymbol{u} \cdot \nabla \boldsymbol{u} \right) + \nabla p - \nabla \cdot 2 \, \mu \, \boldsymbol{D}(\boldsymbol{u}) = \rho \, \boldsymbol{f} & \text{in } \Omega \left(1 \right) \\ \nabla \cdot \boldsymbol{u} = 0 & \text{in } \Omega \left(2 \right) \\ \boldsymbol{u} = \boldsymbol{g} & \text{on } \Gamma \left(3 \right) \end{cases}$$

$$\mathbf{U}(\boldsymbol{x},0) = \boldsymbol{u}^0(\boldsymbol{x}) \qquad \qquad \text{in } \Omega(4)$$

ここで, u は流速, p は圧力, f は外力, ρ は密度, μ は粘 性係数, D(u) は以下に示す歪み速度テンソルである.

$$\boldsymbol{D}(\boldsymbol{u}) = \frac{1}{2} \left(\nabla \, \boldsymbol{u} + (\nabla \, \boldsymbol{u})^T \right) \tag{5}$$

特性法では,式(1)の加速度項(時間微分項と移流項)を 以下のような Lagrange 微分の形で表す.

$$\dot{\boldsymbol{u}} \equiv \frac{\partial \boldsymbol{u}}{\partial t} + \boldsymbol{u} \cdot \nabla \, \boldsymbol{u} = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}\tau} \boldsymbol{u}(\boldsymbol{X}(\boldsymbol{x},\,t\,;\,\tau),\,\tau)\big|_{\tau=t} \qquad (6)$$

ここで, $X(x, t; \tau)$ は時間 t での位置 x を起点とする特性曲線上の時間 τ での位置であり,以下のような常微分方程式によって求められる.

$$\begin{cases} \frac{\mathrm{d}\boldsymbol{X}}{\mathrm{d}\tau} = \boldsymbol{u}\left(\boldsymbol{X}(\boldsymbol{x},\,t\,;\,\tau),\,\tau\right)\\ \boldsymbol{X}(\boldsymbol{x},\,t\,;\,t) = \boldsymbol{x} \end{cases}$$
(7)

3. 特性法の時間離散

特性法の時間離散に線形加速度法を用いた手法³⁾を適用 する.この手法は,時間増分を Δt ,時間ステップ数を \cdot^n と すると,以下のように表される.

$$\tilde{\boldsymbol{u}} = \boldsymbol{u} \circ \boldsymbol{X}^n + (1 - \theta) \,\Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}} \circ \boldsymbol{X}^n \tag{8}$$

$$\begin{cases} \rho \, \dot{\boldsymbol{u}}^{n+1} + \nabla \, p^{n+1} \\ -\nabla \cdot 2 \, \mu \, \boldsymbol{D}(\tilde{\boldsymbol{u}} + \theta \, \Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}}^{n+1}) = \rho \, \boldsymbol{f}^{n+1} \left(9\right) \\ \nabla \cdot (\tilde{\boldsymbol{u}} + \theta \, \Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}}^{n+1}) = 0 \end{cases} \tag{10}$$

$$\boldsymbol{u}^{n+1} = \tilde{\boldsymbol{u}} + \theta \,\Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}}^{n+1} \tag{11}$$

Key Words: *CFD, FEM, characteristic Galerkin, Hermite* 〒039–1192 青森県八戸市大字田面木字上野平 16−1 TEL:0178–27–7304, FAX:0178–27–7316

八戸高専	正会員	丸岡	晃
富山大学	正会員	奥村	弘

ここで, $X^n (\equiv X(x, t^{n+1}; t^n))$ は x を起点とする特性曲線上の上流点の位置, $u \circ X^n$, $\dot{u} \circ X^n$ は X^n での流速と加速度であり, 合成関数として表される.また, θ は, $\theta = 1/2$ のとき時間 2次精度の線形加速度法となり, $\theta = 1$ のとき時間 1次精度の後退差分法となる.

ところで,野津・田端⁴⁾による Crank-Nicolson 型の近似 による時間 2 次精度の特性有限要素法では,合成関数が粘 性項,外力項,圧力項に含まれる.また,前ステップの圧力 p^n を用いることによる不安定性を改善するために, Δt の 十分小さい時間 1 次精度の特性有限要素法を交互に用いて いる.一方,線形加速度法を用いた本手法では,合成関数の 項は,式(8)のみにしか現れない.また,圧力項は p^{n+1} の みで評価されるため,安定性に影響はなく,時間 1 次精度の 特性有限要素法を挟む必要がない.

4. 混合型有限要素近似

 Ω を有限要素ごとの三角形領域 Ω_e $(1 \le e \le N_{el})$ に分割 する.本研究では,図-1 に示すような,流速に Hermite 型 三角形 3 次要素,圧力に三角形 1 次要素を用いた混合型有 限要素近似を適用する.



 Ω における有限要素近似を u_h , p_h , Ω_e における有限要素近似を $u_h|_{\Omega_e}$, $p_h|_{\Omega_e}$ とすると,以下のようになる.

$$\begin{aligned} \boldsymbol{u}_{h}|_{\Omega_{e}} &= H_{0\alpha}\boldsymbol{u}_{\alpha} + H_{x\alpha}\frac{\partial\boldsymbol{u}}{\partial x}\Big|_{\alpha} + H_{y\alpha}\frac{\partial\boldsymbol{u}}{\partial y}\Big|_{\alpha} + H_{0e}\boldsymbol{u}_{e} \quad (12)\\ p_{h}|_{\Omega_{e}} &= L_{\alpha}\,p_{\alpha} \end{aligned}$$
(13)

ここで, L_{α} は面積座標, $H_{0\alpha}$, $H_{x\alpha}$, $H_{y\alpha}$, H_{0e} はHermite 型三角形 3 次要素の補間関数であり, L_{α} の関数である.

5. 数値計算法

(1) 上流点の位置

本研究では,式(7)を多段法によって求める.まず, $t^{n+\frac{1}{2}}$ での流速を Adams–Bashforth 法によって近似する.

$$\boldsymbol{u}_{h}^{*} = \frac{1}{2} \left(3 \, \boldsymbol{u}_{h}^{n} - \boldsymbol{u}_{h}^{n-1} \right) \tag{14}$$

つぎに,節点 $l(1 \le l \le N_{nd})$ の位置を x_l ,上流点の位置を X_l^n とし, $\left(\frac{x_l+X_l^n}{2}, t^{n+\frac{1}{2}}\right)$ での流速 $u_l^{(m)}$ を以下のような反復計算によって求める.

$$\begin{cases} \boldsymbol{u}_{l}^{(m)} = \boldsymbol{u}_{h}^{*}(\boldsymbol{x}_{l} - \frac{\Delta t}{2} \, \boldsymbol{u}_{l}^{(m-1)}) & (m = 1, \, 2, \, \cdots) \\ \boldsymbol{u}_{l}^{(0)} = \boldsymbol{u}_{l}^{*} \end{cases}$$
(15)

m = 1 でも時間 2 次精度となる . m は少ない反復数で十分 であり ,本研究では m = 2 としている . $u_l^{(m)}$ によって ,上 流点の位置 X_l^n を以下のように求める .

$$\boldsymbol{X}_{l}^{n} = \boldsymbol{x}_{l} - \Delta t \, \boldsymbol{u}_{l}^{(m)} \tag{16}$$

(2) 合成関数の扱い

特性有限要素法では,定式化に必要な積分に合成関数 が含まれるが,式 (12)の有限要素近似による合成関数 $u_h \circ X^n|_{\Omega_e}$ が複数の要素にまたがるため,その積分に 対して数値積分を行うなどの何らかの近似が必要になる. 本研究では,合成関数の扱いを簡略化するために,図-2 に 示すように上流点の位置 X^n においても X^n_{α} ($\alpha = 1, 2, 3$) を頂点とする Hermite 型三角形 3 次要素を構築することに よって,要素ごとの合成関数を 1 つの多項式として近似す る.なお, X^n_e は X^n_{α} から求められる要素の重心とする.



図-2 上流点の位置における Hermite 型要素の構築

(3) HCG-LA 法の定式化

 u_h , p_h と同様の有限要素空間の重み関数を w_h , q_h とする. w_h を式 (8)(9) に, また, q_h を式 (10) に乗じ, Ω で積分することによって Galerkin 法による弱形式が得られる.

$$\int_{\Omega} \boldsymbol{w}_{h} \cdot \tilde{\boldsymbol{u}}_{h} \, \mathrm{d}\boldsymbol{x} = \int_{\Omega} \boldsymbol{w}_{h} \cdot \left(\boldsymbol{u}_{h} \circ \boldsymbol{X}^{n} + (1-\theta) \, \Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}}_{h} \circ \boldsymbol{X}^{n}\right) \, \mathrm{d}\boldsymbol{x} \quad \forall \, \boldsymbol{w}_{h} \quad (17)$$

$$\int_{\Omega} \boldsymbol{w}_{h} \cdot \rho \, \dot{\boldsymbol{u}}_{h}^{n+1} \, \mathrm{d}\boldsymbol{x} - \int_{\Omega} \nabla \, \boldsymbol{w}_{h} \, p_{h}^{n+1} \, \mathrm{d}\boldsymbol{x} \\ + \int_{\Omega} \boldsymbol{D}(\boldsymbol{w}_{h}) : 2 \, \mu \, \boldsymbol{D}(\tilde{\boldsymbol{u}}_{h} + \theta \, \Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}}_{h}^{n+1}) \, \mathrm{d}\boldsymbol{x} \\ = \int_{\Omega} \boldsymbol{w}_{h} \cdot \rho \, \boldsymbol{f}_{h}^{n+1} \, \mathrm{d}\boldsymbol{x} \quad \forall \, \boldsymbol{w}_{h}$$
(18)

$$\int_{\Omega} q_h \nabla \cdot \left(\tilde{\boldsymbol{u}}_h + \theta \,\Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}}_h^{n+1} \right) \mathrm{d}\boldsymbol{x} = 0 \quad \forall \, q_h \tag{19}$$

$$\boldsymbol{u}_h^{n+1} = \tilde{\boldsymbol{u}}_h + \theta \,\Delta t \, \dot{\boldsymbol{u}}_h^{n+1} \tag{20}$$

式 (18)(19) は通常の混合型有限要素法による定式化である.

式 (17) は各方向で分離でき,総自由度数は,それぞれ, $N_{nd} \times 3 + N_{el} \times 1$ となり,式 (18)(19)の総自由度数は, $N_{nd} \times 7 + N_{el} \times 2$ となる.ただし,要素ごとの自由度は, 静的縮約によって消去することができる.また,連立1次 方程式の行列は,式 (17),式 (18)(19)とも対称化できる.

本手法では,高次の補間関数を適用しているため,係数行 列の作成に複雑な積分計算が要求されるが,本研究では,こ の積分計算にフリーの数式処理システム Maxima⁵⁾を利用 し,解析的に積分を行っている.さらに,Maximaでは,出 力結果を Fortran 形式に変換する機能があるので,Fortran 言語によるコーディングを比較的容易に行うことができる.

6. 数值実験

本手法の計算精度を評価するための数値実験を行う.

 $\Omega=(0,1) imes(0,1)$ において,以下のような厳密解を満足するようにf,g, u^0 を与える.

$$\begin{cases} u = \pi \sin(2\pi y) \sin^2(\pi x) \sin t \\ v = -\pi \sin(2\pi x) \sin^2(\pi y) \sin t \\ p = \cos(\pi x) \sin(\pi y) \sin t \end{cases}$$

有限要素分割は, Ω の1辺の分割数を N とする小正方形 を対角線で二分する規則的な三角形要素分割とする.

計算条件は , $N=16,\,32,\,64,\,128,\,256$, $\Delta t=1/(4N)$, $\theta=1,\,1/2$, $\rho=1$, $\mu=10^{-2}$ とする .

計算精度は,t = 1 での計算結果から,以下のような $H^1(\Omega)^2$ ノルムによる相対誤差によって評価する.

Relative error =
$$\frac{||\boldsymbol{u}_h - \Pi_h \boldsymbol{u}||_{H^1(\Omega)^2}}{||\Pi_h \boldsymbol{u}||_{H^1(\Omega)^2}}$$

ここで, Π_h は u_h と同様の補間作用要素である.

図-3 に Δt と相対誤差の関係を示す.プロットの右上が N = 16, 左下が N = 256 である. $\theta = 1$ のとき傾きが約 1 であることから時間 1 次精度であり, $\theta = 1/2$ のとき傾き が約 2 であることから時間 2 精度であるといえる.



7. おわりに

HCG-LA 法を 2 次元非圧縮性 Navier-Stokes 方程式に

適用し,数値実験によって時間2次精度を実証した.

参考文献

- 丸岡,小保内,奥村,移流拡散問題における Semi-Lagrange Galerkin 法,ながれ, 27, 2008.
- 2) 丸岡,小保内,奥村,移流拡散問題における Hermitian Characteristic Galerkin 法,日本計算工学会論文集(投稿中).
- 丸岡,奥村,流れ問題における Hermite 型要素を用いた特性 有限要素法の時間離散について、計算工学講演会論文集,13, 2008.
- 野津,田端, Navier-Stokes 方程式のための2次精度特性有限要素スキームとその数値計算,第20回数値流体力学シンポジウム, E5-3, 2006.
- 5) http://maxima.sourceforge.net